

繫伝反切における匣母、云母、喻母

| | |
|-----|---|
| 著者 | 東ヶ崎 祐一 |
| 雑誌名 | 東北大学言語学論集 |
| 号 | 8 |
| ページ | 35-52 |
| 発行年 | 1999-03-25 |
| URL | http://hdl.handle.net/10097/00129633 |

繫伝反切における匣母、云母、喻母

東ヶ崎 祐一

キーワード：『説文解字繫伝』、反切、匣母、云母、喻母

0. はじめに

『説文解字繫伝』は、南唐(937-975)の徐鍇(921-975)が著した『説文解字』の注釈書である。各文字には、朱翱(生没年未詳、徐鍇と同時代人)の付けた反切がある。

この反切について、王(1982)は「朱翱時代、《唐韻》已經通行、而朱翱独不遵用《唐韻》、当是根据当時實際語音而作反切、這是語音史的重要資料」と述べられ、当時用いられていた韻書である『唐韻』の反切を用いていないことから、この反切で表された音が当時の実際の発音を表している点で重要であるとしている。実際、徐鍇の兄である徐鉉の校訂した『説文解字(大徐本)』には、『唐韻』の反切が使われているが、朱翱の反切はこれとは全く違う文字が使われている。

『説文解字繫伝』の反切(以下、繫伝反切と略称)の特徴としては、次の2点が挙げられる。

- (1) イ. ひとつの音に2、3種類の反切がある場合が多い
ロ. 伝統的な韻書の反切と一致しない。

イ. の特徴に関して、『広韻』などの伝統的韻書では、同音とされる字はひとまとまりにされ、ひとつの反切がつけられている。字音を示す際にそのような韻書を用いた場合、同音字には全く同じ反切が使われることになる。ところが『説文解字繫伝』においては、次のように異なる反切が使われている。

- (2) 迹：子壁反
借：資昔反
脊：津易反 (『広韻』昔韻精母[ts-]、資昔切)

この3字の発音は全く同じなのであるが、これらに対して3種類の異なる反切が使われている。しかしすべてにおいてこれが当てはまるわけではなく、中には1種類の反切のみが使われている音も存在する²。

ロ. の特徴に関しては、次の(3)の例が挙げられる。

- (3) 庚：根横反（『広韻』庚韻古行切）
 耕：根横反（『広韻』耕韻古茎切）

この2つの音、及びこれらと韻母を同じくする小韻、すなわち庚韻と耕韻は、伝統的な『切韻』系の韻書（この時代では『唐韻』が用いられる）では区別されている。実際には庚韻と耕韻は8世紀頃までに合流しているにもかかわらず、分類上は前時代のものが依然として踏襲されているのである。これに対して繫伝反切は(3)のように、庚韻と耕韻に対してまったく区別をしていない。

ここであげた2つの特徴から、繫伝反切は、伝統的な韻書などによったものではなく、当時の実際の言語音を表すために新たに作られたものであると考えられている。王(1985)ではこれを、晩唐～五代(836-960)の音体系を示す資料として取り上げている。

本稿では、繫伝反切は10世紀の中国語の実際の音に基づいていると考える。先行研究では1. 3声母は中古漢語と同じく区別されていた、2. 云母と喻母は混同されていた、3. すべてがひとつに合流していた、という3つの説があるが、それに代わり、匣母については喻母と混同されるのは四等のものだけであり、また、云母については喻母と混同されるのは開口だけであり、合口は混同されないことを本稿では論じる。

1. 匣母・云母・喻母の分布

中古漢語に、匣母・云母・喻母という3種類の声母が存在する。これらは、後続する介音によって現れ方が決まっている。

中古漢語には、弱い口蓋化を示す三等介音 -i- と、強い口蓋化を示す四等介音 -i- の2種類が存在する。これらの介音の現れ方は匣母・云母・喻母では、(4)のようにそれぞれ違う。

- (4) 匣母 fi : 直音 (-i-、-i- ともにない)
 云母 ɸ (ゼロ声母) : 拗音三等 (-i- がある)
 喻母 j³ : 拗音四等 (-i- がある)

これをみると、この3つの子音は相補分布をしていることがわかる。

ところが8世紀以降、直音のうち主母音が -e- のものが、介音 -i- をもつようになり、拗音四等になる(平山 1976, p. 159)。その結果、匣母は拗音四等にも現れることになり、分布は次のようになった。

| (5) | 直音 | 三等 | 四等 |
|-----|------|------|------|
| 匣母 | fi- | ---- | fii- |
| 云母 | ---- | i- | ---- |
| 喻母 | ---- | ---- | ji- |

これによると、主母音 -e- の拗音四等化 (-e- > -ie-) により、匣母と喻母の間に音韻的対立が生まれたことになる。

2. 先行研究における分類

10世紀の音資料である繫伝反切で、匣母・云母・喻母の3つの声母がどのような状況にあるかに関して、先行研究をみることにする。

繫伝反切についての先行研究は、3声母について次のように分類をしている。

- (6) イ. 匣母・云母・喻母の区別が残っている(嚴 1943)
- ロ. 云母と喻母は混同され、匣母との2類に分かれる(張世祿 1944)
- ハ. 匣母・云母・喻母の3声母は混同されている(王 1982、張慧美 1989)

このように、先行研究の結論には差があることがわかる。

嚴(1943)・張世祿(1944)において採られた方法は、「反切系聯法」とよばれるものである。これは、反切に用いられている字を調べ、その字の反切に使われている字を調べ、これを繰り返すことにより同じ音を持つ字をグループ分けしてゆく方法であり、もっともよく用いられている伝統的な方法である⁴。しかしこの方法は、同一のはずのグループが偶然2つに分かれてしまったり、また例外的な反切が混じることによって、異なった音が一つのグループにまとまってしまったりする可能性がある。

云母と喻母については、嚴(1943)では別のグループとし、張世祿(1944)は同じグループだとした。その結果、2つの研究に違いが生じることになったと考えられる。

それに対し、王(1982)は反切系聯法を採らず、中古漢語の枠組みをもとに、それから外れる例外的な反切を見つけだして挙げることによって分類をした。しかし、例外的な反切が音韻変化の証拠であるのか、それとも単なる例外なのかを判断する基準が示されていないため、この方法の場合でもグループ分けの曖昧さは依然残っている。

張慧美(1989)では、上記のような先行研究の問題点を克服するため、反切系聯法で分類した上で、中古漢語の枠組みから外れる反切の数および割合を調べて、声母の分類を判断している。この中で、繫伝反切での匣母・云母・喻母それぞれの反切上字(声母を表す字)と反切帰字(反切によって発音を示される字)の数を調べた結果は、次の通りである。

| (7) 反切上字\帰字 | 匣母 | 云母 | 喻母 |
|-------------|-----|-----|-----|
| 匣母 | 362 | 0 | 8 |
| 云母 | 7 | 121 | 5 |
| 喻母 | 40 | 15 | 304 |

匣母と云母・喻母が混同される割合 : 55 / 807 (6.4 %)

云母と喻母が混同される割合 : 20 / 425 (4.5 %)

張慧美はこの数字を挙げた上で、3 声母が混同される例の数が多いので例外とは見なせないとし、よって3 声母は合流していたと論じている。

張慧美の方法は、例外的と考えられる反切の全体に対する比率を調べることによっている。そのため、声母が混同されているかどうかの判断基準が、先行する研究よりもより客観的になっている感がある。

しかしこの方法による3 声母混同の判断においても、まだ明らかにすべき点が残っている。すなわち、ある条件下において音の変化が起こり、その結果が反切に反映されている可能性は考慮されていない。音変化が起こっている、または起こりつつある場合、例外的反切は何らかの音韻の特徴を示しているはずである。そのように考えることにより、どのような音変化があったのか明らかにできる。

3. 分析

ここでは、張慧美 (1989) の中で挙げられた反切を再分類し、かつ混用例を観察することにより、張慧美が主張するように3 声母は一つにまとまるのか、それとも何らかの区別があったのかを明らかにする。

張慧美 (1989) で挙げられた反切 862 例の中から、明らかに誤りであるものを除いた結果、反切帰字が匣母であるもの 409 例、云母であるもの 137 例、喻母であるもの 315 例が得られた。これらをもとに分析を進める。

3.1 匣母と喻母の混同

匣母と喻母が混同される例は、次の通り。

(6) a. 反切上字が喻母、帰字が匣母の例 : 41 例

| | | |
|----------|----------|----------|
| 異契反2 (系) | 亦啓反4 (誤) | 移鷄反1 (郎) |
| 勻低反1 (鄰) | 勻迷反7 (畦) | 羊狄反2 (覲) |
| 移隔反1 (蒿) | 余請反3 (迴) | 與辟反1 (校) |
| 易頭反2 (睨) | 羊截反4 (頁) | 由堅反1 (賢) |
| 預頭反3 (鉉) | 豫頭反1 (泫) | 唯專反1 (菴) |
| 羊帖反6 (挾) | 易沓反1 (𪛗) | |

b. 反切上字が匣母、帰字が喻母の例 : 8 例

| | | |
|----------|----------|----------|
| 玄遇反3 (諭) | 玄恕反1 (虞) | 玄經反4 (瑩) |
|----------|----------|----------|

1 節の (4) で、匣母には介音を持たない「匣母直音」と、-i- 介音を持つ「匣母四等」の 2

つに分かれたと述べた。ここで(6a)で挙げた40例について、反切母字がこの2種の声母のどちらを持つか、数を示すと次の通りである。

- (7) 反切母字が匣母直音 : 1例 (蒿: 移隔反)
反切母字が匣母四等 : 40例

(7)で示されるように、混同例の中では圧倒的に匣母四等を声母にもつ字が多い。また(6b)で現れる反切上字「玄」も、声母は匣母四等である。

さらに、匣母四等と喻母の混用される例の全体に占める割合を計算してみると、47/395(11.9%)となる。混同例の数は全体の一割以上にものぼり、例外として無視できるものとは言えない。これらのことから、喻母と混同されたのは匣母全体でなく、匣母四等だけであったと考えられる。

次に、反切上字も母字も匣母である反切のうち、匣母直音と匣母四等の組み合わせとその現れる数は、以下のようになる。

- (8) a. 反切上字が匣母直音、母字が匣母直音 : 331例
b. 反切上字が匣母四等、母字が匣母四等 : 31例
c. 反切上字が匣母直音、母字が匣母四等 : 11例
迴桂反3(恵)⁵ 回桂反1(漣) 戸迷反1(鑑)
戸定反1(脛) 迴茜反3(眩) 胡涓反1(縣)
乎決反1(穴)
d. 反切上字が匣母四等、母字が匣母直音 : 1例
兮卓反1(鸞)

匣母四等の全体に占める数(40例)から考えると、混同数は12例と決して少なくない。しかし(8c)で用いられる反切上字のうち「迴(匣母直音)」は、張(1989)では「迴(匣母四等)」の誤りの可能性があるとされる。これが正しければ、匣母直音と匣母四等が混同される例は6例のみとなる。

「迴」が「迴」の誤りであることを認めない場合でも、匣母四等が母字である反切42例を喻母に含めて、これと匣母直音の混用される割合を計算すると、13/726(1.8%)である。この数は決して多いとは言えず、例外として処理できる範囲である。

以上のことから、喻母と匣母四等は合流していて、匣母直音とは区別されていたと考えてよいであろう。

3.2 云母と喻母の混同

云母と喻母(匣母四等を含む)が混同されている例は、次の通り。

- (9) a. 反切上字が云母、帰字が喻母の例：5 例
 云遇反1（顚）⁶ 有斂反2（剡） 王閔反1（頻）
 雨專反1（圖）
- b. 反切上字が喻母、帰字が云母の例：15 例
 予厥反2（曰） 延耳反1（矣） 延救反8（祐）
 延九反3（右） 延占反1（炎）

中古漢語の音体系において、云母の出現は、その大部分が円唇性わたり音 -u- が後続する（合口）か、円唇母音に後続される場合であり、円唇要素に後続されない（開口）で現れることは少ない。

繁伝反切においても、云母開口は止摂と山摂だけに現れる。このほかにも云母は、音配列上 -u- が現れることがない効摂・流摂・咸摂に現れるが、これらを開口として扱っても、云母全体に占める数は137 例中 22 例と少ない。

ここで (9b) の例をみると、15 例中 13 例は、反切帰字が開口のものであり、合口はわずかに 2 例である。このことは云母において開口か合口かで、混用のされ方に違いがあることを示している。

そこで、云母に於ける反切上字と帰字の関係を、後続する円唇性の有無（開合）の区別を考慮して示すと、次のようになる。

- (10) 云母開口 (22 例)
- a. 反切上字が喻母：13 例
 延耳反1（矣） 延救反8（祐） 延九反3（右）
 延占反1（炎）
- b. 反切上字が云母開口：6 例
 有連反1（焉） 尤舊反2（宥） 焉秋反1（沈）
 炎捷反1（曄） 尤矯反1（鴉）
- c. 反切上字が云母合口：3 例
 于救反1（瘡） 宇牛反1（郵） 羽秋反1（尤）
- (11) 云母合口 (114 例)
- a. 反切上字が喻母：2 例
 予厥反2（曰）⁷
- b. 反切上字が云母開口：1 例
 又兩反1（往）⁸
- c. 反切上字が云母合口：111 例

云母開口においては、22 例中 13 例と、半数以上が反切上字に喻母を用いていることがわかる。このことは、云母が円唇性をもたない場合において、喻母と合流する、あるいは混用される傾向にあったことを示すと考えられる。(9a) の 5 例のうち 2 例が、云母開口でもって喻母を表記しようとしている例であることも、2 つの声母の合流傾向の根拠となる。

云母開口が喻母と同じグループに属すると考えると、云母合口と喻母（云母開口および匣母四等を含む）との混用される割合は、7/533 (1.3 %) となる。このように例外の数が全体に占めるパーセンテージから、2 つは区別されていると考えられる。

以上のことから、先行研究とは異なり、喻母と云母開口は合流あるいは混同されていて、云母合口とは区別されていたと言ってもよい。

3.3 匣母と云母の混同

先に述べたように、匣母四等と云母開口は、喻母に合流していたと考えられる。そこでそれらを除いた、匣母直音 (332 例) と云母合口 (114 例) の混用例をみると、次の通りである。

- (12) a. 反切上字が云母合口、帰字が匣母直音の例 : 4 例

員聡反3 (洪) 于咸反1 (痛)

- b. 反切上字が匣母直音、帰字が云母の例 : なし

これらの混用される割合は、4/446 (0.9 %) となり、よって匣母直音と云母合口の間でも区別があったと考えられる。

なおこのほかに、反切上字が云母開口、帰字が匣母直音の反切「瀉 : 矣抱反」が 1 例ある。云母開口は喻母に合流していたとすれば、これを匣母と喻母の混同例に含めることができる。その結果、混用される割合は 14/726 (1.9 %) となる⁹。

以上の分析から、匣母四等と云母開口も、合流あるいは混同されていたと言ってもよい。

4. まとめ

3. まですべて述べてきたことをまとめると、中古漢語の匣母・云母・喻母という 3 種類の声母は、繁伝反切においては次のように区別されていたと考えられる。

- (13) a. 匣母直音
b. 云母合口
c. 喻母、云母開口、匣母四等

本論文では『説文解字繁伝』の反切（繁伝反切）における、匣母・云母・喻母の混用例

を、直音と四等、開口と合口といった声母内の介音による区分をもとに再検討した。その結果、1. 3 声母は中古漢語と同じく区別されていた、2. 云母と喻母は混同されていた、3. すべてがひとつに合流していた、という先行研究の3つの説はいずれも不十分であることを明らかにした。

まず、匣母においては直音と四等を分けて考えるべきであり、そのうち喻母と混同されるのは四等のものだけであり、直音は混同されない。また、云母においては開口と合口を分けて考えるべきであり、そのうち喻母と混同されるのは開口だけであり、合口は混同されない。このことから、(13) のようになることが結論できる。すなわち、この分類の流動性は、繫伝反切は当時の実際の音を表していることの根拠となるのである。

注

1. 『説文解字繫伝』の詳しい説明については、嚴 (1943) や頼 (1983) を参照されたい。
2. 例) 「歴、漑、櫟、礫、鬲」など: 連的反 (『広韻』錫韻来母 [l-], 郎擊切)。
3. (3) (4)での音価は森 (1991) の p. 293 および p. 295 の表11による。
なお、平山 (1976) や王 (1985) では、云母は匣母と合併されて、同一子音であったとされている。しかしここでは通説に基づき、3 声母を分立させた。
4. 反切系聯法についての詳しい説明は平山 (1976) などを参照されたい。
5. 各反切の後の数字は、その反切が現れた回数を表す。またかっこ内の字は、その反切がつけられた字のうちの代表的な字である。
6. 「云遇反」については、同一音をもつ字の反切に「玄遇反」が4例あるので、反切上字に「m字形の類似による誤りがあるとも考えられる。
7. 「予厥反」については、同一音をもつ字の反切に「于厥反」が3例あるので、反切上字に字形の類似による誤りがあるとも考えられる。
8. 「又兩反」は、反切母字が合口であるにもかかわらず、反切上字にも下字にも合口的要素が現れない。なお同音字「咼」の反切は「于放反」、「廷」の反切は「于況反」である。
9. 「矣抱反」については、同一音をもつ字の反切に「侯抱反」が6例、「侯抱反」が1例あるので、反切上字に字形の類似による誤りがあるとも考えられる。

参考文献

- 平山久雄 (1976) 「中古漢語の音韻」、牛島徳次ほか『中国文化叢書 1 言語』大修館書店刊
所収
- 頼 惟勤 (1983) 『説文入門』、説文会編、大修館書店
- 森 博達 (1991) 『古代の音韻と日本書紀の成立』、大修館書店
- 王 力 (1982) 「朱翱反切考」、『王力文集』第18巻 (1991) 山東教育出版社刊、初出『龍
蟲並雕齋文集』(1982) 第3冊
- (1985) 『漢語語音史』、中国社会科学出版社
- 嚴 学窘 (1943) 「小徐本説文反切之音系」、『民族研究文集』(1997) 民族出版社刊
- 張 慧美 (1989) 「評張世祿、王力兩家對朱翱反切聲類圖分之得失」、『建國學報』建國工
業專科學校、台灣
- 張 世祿 (1944) 「朱翱反切考」、『説文月刊』第2号

資料：張慧美 (1989) に挙げられた反切の分類表

1.a. 匣母直音

通攝一等

| | | | |
|----|-----|-----|-----|
| 平声 | 員聰3 | 賀聰1 | 戸聰1 |
| 入声 | 胡僕4 | 胡谷1 | 胡獨1 |

江攝二等

| | | | |
|----|-----|-----|-----|
| 平声 | 侯邦4 | | |
| 上声 | 限蚌2 | | |
| 去声 | 恨絳2 | | |
| 入声 | 遐岳4 | 遐嶽1 | 兮卓1 |

遇攝一等

| | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|
| 平声 | 魂徒7 | 魂孤2 | | |
| 上声 | 桓土5 | 桓古1 | 下古1 | 後古1 |
| 去声 | 渾素6 | 胡故1 | 下故1 | |

蟹攝一等開口

| | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|
| 平声 | 侯猜1 | 候猜1 | 猴猜1 | |
| 上声 | 侯乃1 | | | |
| 去声 | 侯耐2 | 乎蓋1 | 恒艾1 | 桓艾1 |

蟹攝一等合口

| | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|
| 平声 | 戸隈2 | 戸瑰1 | | |
| 去声 | 胡塊3 | 胡愧1 | 恒艾1 | 戸兌1 |

蟹攝二等開口

| | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|
| 平声 | 痕皆5 | 侯釵1 | 候釵1 | 侯楷1 |
| 上声 | 侯豸1 | 猴豸1 | | |
| 去声 | 下夬1 | 恒介1 | 恒夬1 | 遐戒1 |

蟹攝二等合口

| | | |
|----|-----|-----|
| 平声 | 戸埋3 | 戸乖1 |
| 去声 | 戸敗1 | |

臻攝一等開口

| | | |
|----|-----|-----|
| 平声 | 侯恩1 | 戸根1 |
| 上声 | 侯懇1 | 遐懇1 |
| 去声 | 遐艮1 | |

| | | | |
|--------|------|------------------|-----|
| 入声 | 很没1 | 胡兀1 ¹ | |
| 臻摄一等合口 | | | |
| 平声 | 戸昆5 | 胡昆1 | |
| 上声 | 胡本2 | 戸本1 | 狐損1 |
| 去声 | 胡頓3 | | |
| 入声 | 胡兀3 | | |
| 山摄一等開口 | | | |
| 平声 | 痕安2 | 胡安1 | 侯干1 |
| 上声 | 遐緩1 | | |
| 去声 | 侯吁1 | | |
| 入声 | 衡葛2 | 衡割1 | |
| 山摄一等合口 | | | |
| 平声 | 戸寒9 | 胡官2 | 戸官1 |
| 去声 | 侯玩12 | 戸岸4 | |
| 山摄二等開口 | | | |
| 平声 | 侯艱3 | 候艱3 | 候間1 |
| 上声 | 侯産2 | | |
| 去声 | 閑旦1 | | |
| 入声 | 閑刮2 | 痕札2 | 閑括1 |
| 山摄二等合口 | | | |
| 平声 | 戸刪4 | 戸関2 | |
| 上声 | 戸版2 | | |
| 去声 | 戸慣4 | 戸祖1 | |
| 入声 | 胡刮1 | 胡劼1 | |
| 効摄一等 | | | |
| 平声 | 戸高1 | | |
| 上声 | 候抱6 | 候抱1 | 矣抱1 |
| 去声 | 候到2 | 行高1 | |
| 効摄二等 | | | |
| 平声 | 侯交4 | 豪交1 | |
| 上声 | 下巧1 | | |
| 去声 | 侯教1 | | |

¹ 反切帰字「𪛗」は開口だが、反切は合口のものである。

果摄一等開口

| | |
|----|-----|
| 平声 | 閑俄4 |
| 去声 | 候箇1 |

果摄一等合口

| | | |
|----|-----|-----|
| 平声 | 戸歌4 | |
| 上声 | 戸果1 | 胡顆1 |

仮摄二等開口

| | | |
|----|-----|-----|
| 平声 | 痕加7 | 乎加1 |
| 上声 | 恨且1 | |
| 去声 | 限乍1 | |

仮摄二等合口

| | | |
|----|-----|-----|
| 上声 | 戸把4 | 乎瓦1 |
| 去声 | 戸化1 | |

宕摄一等開口

| | | |
|----|-----|-----|
| 平声 | 恒湯2 | |
| 入声 | 閑博4 | 閑縛2 |

宕摄一等合口

| | | |
|----|------|-----|
| 平声 | 戸荒11 | 戸光5 |
| 上声 | 胡莽2 | 胡晃1 |
| 入声 | 戸廓1 | 戸霍1 |

梗摄二等開口

| | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|
| 平声 | 閑橫4 | 限羹1 | 候宏1 | |
| 上声 | 限猛1 | 恨耿1 | | |
| 入声 | 閑隔2 | 下革1 | 行赫1 | 移隔1 |

梗摄二等合口

| | | |
|----|-----|-----|
| 平声 | 乎萌2 | 混耕2 |
| 去声 | 戸更2 | |
| 入声 | 戸麦2 | |

曾摄一等開口

| | |
|----|-----|
| 平声 | 胡麌1 |
|----|-----|

曾摄一等合口

平声 戸明¹²
入声 胡國1

流摄一等

平声 何溝4 河溝2
上声 旱斗2
去声 下遘1 寒豆1 胡遘1

咸摄一等

平声 侯貪4 胡甘4
上声 侯勘1 下暫1
入声 後闇2 侯臘2 候臘2 候匣1

咸摄二等

平声 侯多4 于咸1
上声 侯坎2 候坎2 下斬1 寒犯1
去声 寒蘸3
入声 侯甲2 侯夾1 候夾1 下夾1 胡甲1

1.b. 匣母四等

蟹摄四等開口

平声 賢迷6 移鷄1
上声 亦啓4
去声 異契2

蟹摄四等合口

平声 勾迷7 勾低1 戸迷1
去声 迴桂3 回桂1

山摄四等開口

平声 形先8 螢先1 由堅1
上声 易頭2
入声 羊截4

山摄四等合口

平声 胡涓1 雨專1 唯專1
上声 預頭3 豫頭1
去声 迴茜3 迴茜1

² 反切下字「明」は梗摄三等相当。「朋」（曾摄一等）の誤りか？

入声 乎決1

効摄四等

上声 易查1

梗摄四等開口

平声 賢星7 賢經1

上声 賢頂1

去声 戸定1

入声 羊狄2

梗摄四等合口

平声 玄經4

上声 余請3

入声 與辟1

咸摄四等

平声 賢兼2

入声 羊帖6

2.a. 云母開口

止摄三等開口

上声 延耳1

山摄三等開口

平声 有連1

効摄三等

上声 尤矯1

流摄三等

平声 焉秋2 字牛1 羽秋1

上声 延九1

去声 延救8 尤舊2 于救1

咸摄三等

平声 延占1

入声 炎捷1

2.a. 云母合口

通摄三等

平声 于弓1 于戎1

止摄三等合口

平声 宇婦6 于婦4 位遼1 宇非1 雨隨1

上声 于虺4 于委2 于彼2 于毀2 榮美1

去声 于鬼1

去声 于貴4 云貴1 于醉1

遇摄三等

平声 員須6 羽朱1

上声 于甫6 于補1 于詡1 于矩1

去声 云煦2

蟹摄三等合口

去声 于歲5

臻摄三等合口

平声 羽分8 員分1 雨奔1

上声 雨牝3 于憚1

去声 于問5 于蘊1

入声 于筆2

山摄三等合口

平声 羽元6 羽先1 于間1 于專1

上声 于阮1

去声 于面1 于眷1

入声 于厥3 予厥2

宕摄三等合口

平声 于光1

去声 于況1 于放1 又兩1

入声 王若1

梗摄三等合口

平声 永兵1

上声 雨省1

去声 于柄3 為命1

曾撮三等合口

入声 于抑2 于憶1 于逼1

c. 喻母

通撮四等

平声 與封10 與恭1 以弓1
上声 與恐7 余奉1
去声 弋雍1
入声 融六9 余足5

止撮四等開口

平声 寅之11 以支6 寅支1 以之1 弋伊1
上声 以爾3 移里2
去声 引義2 余吏2 剡義1 延示1 弋示1

止撮四等合口

平声 與追5
上声 營跬2 與水1

遇撮四等

平声 羊朱13 以虛10 勻取3 勻俱1 弋紆1
 以徐1
上声 尹汝4 弋主2 尹女1
去声 玄遇3 云遇1 玄恕1 羊遇1 羊洳1
 養遇1 與孺1

蟹撮一等開口

上声 夷采1³

蟹撮四等開口

去声 延世5 余制1

蟹撮四等合口

去声 與歲2 予契1 與夬1

臻撮四等開口

³ 喻母が一等韻母と結合する特殊例。これについては松尾良樹「祭韻系の問題」(『アジア・アフリカ言語文化研究』16, 1978)を参照。

| | |
|----|-----|
| 平声 | 翼真3 |
| 上声 | 以矧2 |
| 去声 | 異印4 |
| 入声 | 移七5 |

臻摄四等合口

| | | |
|----|-----|-----|
| 平声 | 與因1 | |
| 上声 | 與準3 | 王閔1 |
| 入声 | 與必6 | |

山摄四等開口

| | | |
|----|-----|-----|
| 平声 | 以然1 | 弋然1 |
| 上声 | 異展2 | 與件1 |

山摄四等合口

| | | |
|----|-----|-----|
| 平声 | 與川3 | 與川1 |
| 去声 | 余羨3 | 與絹1 |

効摄四等

| | | | |
|----|------|-----|-----|
| 平声 | 延朝14 | | |
| 上声 | 以沼2 | 以紹1 | 弋堯1 |
| 去声 | 異召4 | | |

宕摄四等開口

| | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|
| 平声 | 猶良8 | 以箱1 | 移章1 | |
| 上声 | 以像1 | | | |
| 去声 | 胤亮3 | 以象1 | 余亮1 | |
| 入声 | 胤略6 | 胤畧4 | 以灼1 | 胤灼1 |

梗摄四等開口

| | | | | |
|----|-----|-----|-----|-----|
| 平声 | 以征1 | 以成1 | 夷嬰1 | 亦征1 |
| 上声 | 以井1 | | | |
| 入声 | 移尺7 | 移赤4 | 夷益1 | |

梗摄四等合口

| | | | |
|----|-----|-----|-----|
| 平声 | 玄經4 | 余井1 | |
| 上声 | 余郢2 | | |
| 入声 | 與僻1 | 與辟1 | 兪戾1 |

曾摄四等開口

| | |
|----|-----|
| 去声 | 以證1 |
|----|-----|

入声 以即12

流摄四等

平声 延秋14

上声 夷酒6

去声 羊狩3

深摄四等

平声 移今5 移金1

入声 逸入1

咸摄四等

平声 羊廉6

上声 有斂2 延檢1

去声 羊染3

入声 亦接5

(東北大学文学部 助手)

y-h-tow@sal.tohoku.ac.jp